

とく  
徳

ほう  
朋

なむあみだぶつ そうぎ  
南無阿弥陀仏の葬儀

二階堂 ゆきとし  
行壽



にかいどう ゆきとし  
1958—現在  
東京都生まれ。真宗大谷  
派専福寺住職。真宗大谷  
派首都圏教化推進本部  
員。

亡き方は、その人生でいろいろなことに出会ってこられたに違いありません。うれしいこと、楽しいことにも、きっとたくさんお会いになってこられたと思います。けれども、その一方で苦しく、悲しく、つらい出来事にも<sup>あ</sup>遭わざるを得なかったはずです。そしてその中であって、人生を終える時、うれしいこと、楽しいことを共に作ってくださった縁ある方々に、「皆さんのおかげでこの人生を生き尽くすことができました」「出会いをありがとう」と申されたに違いない。

また一方では、自分にとって都合の悪いことにも<sup>あ</sup>遭ってこられたに違いないでしょうけれども、その出来事に対しても、「いろいろと思ひ考えさせられ、そして今の私にまで育てられました」、「本当にいろいろと学ばせてもらいました」、「お世話になりました」と言って、思いでは受け入れ難い事実も受け止めて、いのちを終えていかれたに違いない。

自分の人生に起こるプラスと思う面もマイナスと思う面も全部丸ごと、一点の欠けめもなく、「これが私の人生そのものです」と自分自身の人生に手を合わせていのちを終えていかれた。それが「南無阿弥陀仏」という世界なのではないでしょうか。なかなか私たちは自分の人生に手が合わさりません。自分の思い通りになっていけば、自分の人生も認めて生きていけますが、

思い通りにならなくなると、自分の人生を否定したい思いにかられる時があります。しかし、  
どういふ思いにかられようとも、自分の人生にはかわりありません。

ですから、この私が苦悩を抱えつつも、この世に生を受け、この世を生きていくことの出来る  
真のよりどころ、真の安心を開く道、それが南無阿弥陀仏の教えなのです。いとしき方との  
別れは、悲しみとともに知らされるはかることを超えたいのちの事実です。その事実の前に、  
静かに手を合わせ、頭が下がる。「南無阿弥陀仏」の一言をもって、このいのちを終えていく  
ということは、都合の良いことも悪いことも、人生における出来事全てが、この私のいのちの  
尊い事実であった。このことへのうなずきが「南無」です。

そして、そのうなずきを、遺された私たちに教えて下さる大切な機縁、仏縁が、葬儀という  
仏事であり、離別の涙とともに開かれる「南無阿弥陀仏」の葬儀の場であろうと思うのです。



（『亡き方からのメッセージ』）

●善し悪しを超えた広い世界に立脚して苦勞の絶えないこの人生を歩んで行く事が、南無阿  
弥陀仏の教えを生きることであると思います。 哲弘 拝



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとし  
て毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。